ゼロの使い魔～光と仮面の戦士～

龍斬王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～光と仮面の戦士～

【Ｎコード】
Ｎ１２８０Ｔ

【作者名】
龍斬王

【あらすじ】
ハルケギニアの一人の魔法使いと地球の一人の戦士が出会い、変わっていく物語。

始めに

これは、一人の魔法使いと一人の戦士が作り出す物語……時には、喧嘩をし……時には、助け合い……時には……恋を……したりする。

貴族であり、魔法使いである一人の少女と……平民だが、戦闘力と身体能力が高く、魔法まで使えてしまい、怪人や怪獣とも闘える一人の青年……一方は、『ゼロ』と罵られながらも魔法を唱え……一方は、怪人との戦闘が終了した間際であった……そして、『爆発』と共に……二人は出会い、変わる。

プロローグ

地球・東京都

今、一人の戦士が怪人と闘っていた。

「ハァッ！」

「グギャッ！」

戦士の名は……『仮面ライダーライトブルーディケイド』……この地球で誕生した戦士だ。

「まったく……『鳴滝』は、しつこいな……あんまり長引かせたくないし……一気に決めるか。」

ーＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ……ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥー

「ハッ！……ディメンションキック！！」

ライトブルーディケイドは、空中に飛んだあと、怪人と自分との間にできた『ディメンションカード』をくぐり、怪人に必殺キックを食らわした。

「ふぅ……」

ライトブルーディケイドは、バックルからカードを取り出し変身を解いた。

「これで……本日、４０体目……いい加減にしてくんねぇかな～。」

その姿は……

「さてと……喫茶店でも……」

ーピ、ピッ！ピ、ピッ！ー

「はぁ～……はい、こちら『ジェス』。」

レナンジェス・アルマー……『リリカルなのは＆ａｍｐ；スー

パーヒーローの世界』で『世界の守護者』の二つ名を持つ、『レナンジェス・アルマー』の異時空間同意体。
『ジェスか……ポイントＸ１９で怪人が暴れている……今、ミーナとパトリシアが向かっている。』
「ミーナとパット？大丈夫かな？」
『大丈夫だろ。……多分。』
「ますます不安だ……リン社長～……なんで？アーウィンとグレースを行かせないんすか。」
と、愚痴をこぼすジェス。
『イルムとヘクトールじゃないのか？』
「イルムのバカとヘクトールのアホは当てにならん。」
『そうか……気をつけろ。』
「了解。」

ポイントＸ１９

そこでは、ショッカー戦闘員やデストロン戦闘員が暴れていた。
「おーおー……暴れてる、暴れてる。」
「二人だけでやっちゃう？」
「やっちゃおっか。」
しかし……
「そう……上手く行くと思うなよ？」
「「う゛っ……」」
二人のすぐ後ろにジェスがいた。
「社長から通信でポイントを聞いたらすぐ側が現場だもんな～。」
「「あはは……」」

「まぁ、いい……行くぜ。ミーナ、パット！」
「「うんっ！」」
三人は変身アイテムを取り出し、身に着けた。……ジェスはディケイドライバー、ミーナとパットはロストドライバー。
―ＧＵＲＵＮＧＡＳＵＴＯ―
―ＨＹＵＫＫＥＢＡＩＮ―
「「「変身！！」」」
―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥＬＩＧＨＴＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥ―
―ＧＵＲＵＮＧＡＳＵＴＯ―
―ＨＹＵＫＫＥＢＡＩＮ―
ジェスは仮面ライダーライトブルーディケイド、ミーナは『ライダーヒュッケバイン』、パットは『ライダーグルンガスト』に変身した。
「雑魚ばっかりだし……一気にやろ？」
「賛成！」
「仕方ない。」
―ＧＵＲＵＮＧＡＳＵＴＯＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ―
―ＨＹＵＫＫＥＢＡＩＮＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ―
―ＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ……ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ―
「行くよ……計都羅轟剣……暗剣殺！！」
「ブラックホールキャノン……発射！！」
「ディメンションシュート！！」
三人のライダーの必殺技で跡形もなく消し飛ぶ戦闘員達。
「「いえーい！！」」
「ブライガーのＪ９か？」

その帰り……
「ねぇ、ねぇ、ジェス。ちょーっと……お願いがあるの。」
「なんだよ。」
すると、二人同時に……
「「ご飯、奢って♪」」
しかし……
「断る！！」
即答！！
「「ケチ～……」」
「ケチなもんか……自分の飯ぐらい自分で……ん？」
前を見たジェスが……その場で立ち止まった。
「どうしたの？」
「ジェスっち？」
二人の問いに……
「なぁ……あんなところに、『鏡』なんてあったか？」
「「えっ？」」
ジェスは、鏡の側に行き……ミーナとパットはジェスの後方五メートルの位置にいた。
「これは？」
ジェスが鏡に触れた……その時！！
「うわっ！？」
「「ジェス！！」」
ジェスが鏡に吸い込まれようとしていた。
「全力ダッシュ！」
「オッケー！！」
しかし……二人が追いつくよりも、速く……鏡がジェスを吸い込み、その場から消えていた。
「ジェス？」
「嘘……だよね？ジェス？……ジェスーーーーーーーっ！！」

ミーナは、ジェスの名を呟いてその場に両膝をつき……パトリシアは、信じられないようにジェスの名を叫んでいた。

プロローグ（後書き）

次回予告

サモン・サーヴァントで平民？の『レナンジェス・アルマー』を召喚してしまったルイズ。
見知らぬ場所にいきなり出てきてしまったジェス。

二人が作り出す物語が今、始まる。

第1話　邂逅

第1話　邂逅（前書き）

作者「前回の前書きを削除したのでこれだけは書かせてもらう……
……プロローグで出した、リン社長やパトリシアとミーナは、異時
空間同意体であり……某ロボット大戦のキャラとは若干違います。
……では、第1話、始まります。」

第1話　邂逅

ハルケギニア・魔法学院

―ドッカァーン！―

中庭ででっかい爆発が起きていた。

「またかよ。」

そんな声が聞こえるなか……視線の中心にいる少女は……

「なにが出たのかしら？ペガサス？ドラゴンでも良いわね。」

そんなことを言いながら、煙りが晴れるのを待った……すると

「げほっげほっ……なんだ？何が……」

……

「えっ？」

煙りの中から出たのは……少女の言った、ペガサスやドラゴンではなく……一人の人間だった。

「平……民？」

「『ゼロのルイズ』が平民を召喚したぞ。」

「さすがは、『ゼロのルイズ』だな。」

周りは口々にそんなことを言う。

「なんで？……ゴルベール先生！もう一度、サモン・サーヴァントをさせて下さい！！」

ルイズと呼ばれた少女は、側にいた……教師のゴルベールに言ったが……

「しかし……現に召喚してしまったからには……仕方がないでしょう。」

と、言ってしまった。

「はぁ……わかりました。」

ルイズは青年の前に立った。
「なんだよ？いったい、どこなんだよ！ここは！！」
「うるさいわね……この私が平民のあんたを『使い魔』にしてあげるんだから、光栄に思いなさい。」
その少女の言葉を聞いた時に……
「（使い魔？……マサキの『ファミリア』みたいなもんか？……それとも、夢でちょくちょく出てる『狼や猫なんかを素体にした』（↑アルフとリーゼ姉妹）……あれか？）」
そんなことを考えていると……
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、……五つの力を司るペンタゴン……このものに祝福を与え…我が使い魔となせ！！」
「（何をする気だ？）」
すると……
「んっ……」
少女の方からキスをしてきた。
「（なっ！？）」
それが終わると同時に……
「ぐっ！？……なんだ？この痛みは！？」
「使い魔の証たるルーンが刻まれてるのよ。」
「（ちっ……俺が知ってる使い魔の知識とは違うな。）」
そうこうしているうちに……ルーンを刻む痛みが消えた。
「おや？あなたは使い魔のルーンが『複数』現れていますね。」
『えっ！？』
ルイズを含む生徒が声を出した。
「一応、ルーンをスケッチしますね……。」
ゴルベール先生は、青年に出た……使い魔のルーンをスケッチし始めた。
「（これが……ルーン……だが……この形は…）」
「右手首は終わりました。……あと、左腕と左手首と腹部のルー

ンを写すので、上着を脱いで下さい。」
「ああ……っ！！（これは！？）」
「どうか……しましたか？」
「あっ！……いえ……」
ゴルベールの言葉で我に帰る青年……その青年を遠くから見ている一部の生徒は……
「ねぇ、ねぇ、ちょっとかっこよくない？」
「うんうん。……ギーシュよりも格段にかっこいいよね～。」
女生徒はそんな声をだし……
「あいつ……平民だよな。」
「なんだよ……あの、体つきは……」
男子生徒はそんなことを言っていた。
「終わりましたよ。」
「どうも……」
「それにしても……見たことも無いルーンですね。」
ゴルベール先生はそんなことを言ったが……青年は……
「（腹部と右手首、左手首に出てたのは……おそらく、『ディケイドライバー』に『メビウスブレス』に『ナイトブレス』……でも、なんで？）」
青年が考えていると……
「みなさん……今回の授業はここまでです……教室に戻って下さい。」
すると……ルイズ以外の生徒が魔法で空を飛んで教室に戻って行った。
「あんた……名前は？」
「人に名前を聞く時は……まず、自分から名乗れ。」
「ぐっ……まぁ、いいわ……私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ……私は貴族だから、使い魔に成れたことを光栄に思いなさい。」
「貴族ねぇ……まぁいい、俺はレナンジェス・アルマー……呼

ぶ時はジェスでいい。」
「そう……それじゃ、行くわよ。」
「飛んでいかないのか？」
「歩きで十分よ。」
そう言って、ルイズは歩きだした。
「まったく……」

その夜……

ジェスはルイズの部屋にいた。
「え～と……ジェスだっけ？……あんた、生まれは？」
「俺の生まれ？……親父は日本人で母さんはアメリカ人……
……生まれはアメリカさ……だけど、育ちは日本さ。」
ジェスは普通に説明した……だが……
「アメリカ？ニホン？それどこの国よ。ハルケギニアの何処にも無いわよ。」
「（なるほどな……別世界か。）」
すると……
―コン、コンッ！―
「なに？」
「ん？」
ルイズとジェスが窓に顔を向けたら……そこには……
『クェー、クェー！』
「なに……これ？」
ルイズが指さした物体の正体は……

「『茜鷹』！！……どうして？」
「知ってんの？」
ルイズがジェスに聞いた。
「まぁな……ディスクモード！」
『クェー！』
茜鷹は、ジェスの声で『アカネタカディスク』に変形した。
「なに？何なの？」
しかし、ジェスは答えずにアカネタカディスクを持った。
「さて……」
ーＩＴＥＭＲＩＤＥＯＮＫＡＫＵー
「よし……さーて、何が有ったんだ？」
ジェスは音角にアカネタカディスクをセットして、回した。
「ちょっと！？」
「黙ってろ！！」
ジェスはルイズを黙らせて、アカネタカからの情報を確認しつつ、窓の外の夜空を眺めた。
「……なるほど……確認終了。」
確認終了と同時に、音角は消滅し、アカネタカディスクはジェスのかばんに入れた。
「なぁ、ルイズ？」
「『ルイズ様』でしょ！！……まぁ、いいわ……で、なに？」
「この『世界』は……月が『二つ』有るんだな。」
「なに、当たり前のことを言ってんの？」
「そうか……悪かったな、変なことを聞いて。」
「別にいいわよ。……私、そろそろ寝るから……明日の朝になったら、起こしなさい。」
「それが……『使い魔』の仕事か？」
「そうよ……あと、洗濯も……本来は、主人の目や耳になるのが使い魔だけど……それは、駄目そうね、何も見えないし、何も聞こえないから。じゃあ、おやすみ。」

そう言うと、ベッドに入って眠り始めた。
「寝付くの早いな……さて……」
ジェスは、窓の近くに腰を下ろして……眠り始めた。

数分後……
「（あっ！……何処で、寝ていいか……言うの忘れてた。）……ジェス……あんた……は……。」
ルイズは、窓辺に背をもたれて、寝てるジェスを見た。
「もうっ！！……ちょっと、ジェス？風邪引くわ「姉さん……」……えっ？」
「姉さん……姉さん！」
「……うんっ！！」
ルイズは、ジェスの側に掛け布団を持って移動して、ジェスの隣に座り……ジェスの右手を握りながら……
「大丈夫……ずっと、側にいるから。（ジェスにも……姉がいるんだ……私と同じで……ごめんね……いきなり……召喚……し……て……う〝っ……ううっ……。）」
ルイズは、これまでにない様な優しい声でそう言った後に……掛け布団とジェスの胸元の間に顔を押し付け、泣き出した。

「（ルイズの奴……俺の寝言を聞いたのか……ルイズにも……姉がいるんだな。それに……召喚してしまったことを謝ってるし……これは、護らなきゃな……ルイズの泣き顔は、見たくないしな。）」

ジェスは、寝ていながら……掛け布団とルイズの顔に左手を持って行き……胸元に強く押し付けた。
ルイズは、それが……『もっと泣いてもいい』というサインだと、直感して声を殺して泣いた。

二人は……昼間は、最悪に近い出会いをしたが……この日の夜は……いままでで、最高のものかも知れない。

第1話　邂逅（後書き）

ルイズ「なんか……後半辺りが原作と違うような……」
作者「うるさい……次回、第2話……メイドと授業……。」
ジェス「3話辺りで決闘か？」
作者「さぁな。」
ジェス&ルイズ「「ごまかすな！！」」

第2話　メイドと授業（前書き）

第2話の構想だけで……一月か……明日からは、私の小説はしばらく、更新されません。

第2話　メイドと授業

ジェスが……ルイズに召喚された翌日。

「ルイズ……ルイズ！」
「ふぁ……？」
「朝だぞ。」
ジェスは、ルイズを起こした。
「んーーー……はぁ。」
ルイズは背伸びをして、息をした。
「……着替えるの……手伝…『断るっ！……が』…えっ？」
「こういう……事はできる。」
すると……腹部にディケイドライバーを装着し、一枚のカードを読み込ませた。
―ＲＩＤＥＲＫＹＡＲＡＲＩＤＥ……ＨＩＫＡＲＩＮＡＴＵＭＩ―
「あれっ？……ここは……」
「よっ！『ナツミカン』。」
「夏海です！！」
ジェスが呼び出したのは……仮面ライダーディケイドの一応ヒロインの光夏海だった。
「なんですかっ！？『一応』ヒロインって！？」
「まぁまぁ……ルイズの着替えを手伝ってやって……その間、俺は廊下に居るから。」
しかし……ルイズが……
「だったら、洗濯してきて。」
「はぁ？」

「これ……洗濯物、よろしくね。」
「おいっ！……ったく、わかったよ。」
ジェスは……ルイズから洗濯物の入った籠を受け取り、洗濯する場所を探しに行った。
「まったく……使い魔に洗濯をさせるなよな……場所も知らないし、なんで……女物の下着まで入れてんだよ……はぁ。」
そこへ……
???「あの～……どうかしましたか？」
「ん？」
そこには……メイド服を着た女性がいた。
「（メイド服……なんで？）君は？……ちなみに、俺は……レナンジェス・アルマー、先日……ルイズに召喚された使い魔。」
「これはご丁寧に……私、シエスタと言います。この学園にメイドとして雇ってもらってます。」
それを聞いた時……
「君は……貴族じゃあ、なさそうだね。」
「よく分かりましたね、確かに……私は、貴族ではなく『平民』ですので。それにしても……貴方が、ミス・ヴァリエールの使い魔ですか。」
「まぁな……それより、洗濯する場所は、何処か知らない？来たばかりでわからなくてな。」
「洗濯物でしたら、私がやりますよ。」
その一言に……
「ホントに？……よかった～……正直、女物ばかりだから、やり方知らないんだ。」
「大丈夫ですよ。……終わりましたら、ミス・ヴァリエールの部屋に持って行きますね。」
「お願いな……さてと、そろそろ着替え終わる頃合いだな。」

ルイズの部屋の前

ジェスの予想どうり、既に着替えを終えてルイズが廊下で待っていた。

「遅いっ！！」

「うるせぇな。場所がわからいんだからしかたないだろ……まぁ、これからは、メイドに洗濯は頼めよ。」

「それもそうね。」

するとルイズが……

「それよりも……ナツミ……だったかしら……私の着替えが終わると同時に『消えたんだけど』。」

「まぁ……ずっと、実体化できる訳じゃねぇし……俺の、『頼み』や『指示』を完了したら、効力が切れて消えるだけだし。」

「へぇ～……。」

すると……

―ぐ～……―

「あっ……。」

「／／／／。」

ルイズのお腹が鳴っていた。

「さっ……さぁ！！食堂に行くわよ！！」

「はい、はい。」

二人は、一緒に食堂へ向かった。

地球ＳＩＤＥ

「ジェスが消えた時に……お前達、二人はそれを見ているしか……なかった。……そういう事だな。」

「「はい。」」

リン社長の前に立ち……ジェスが消えた時の様子を話していた……パトリシアとミーナ。

「ふむ……その時に……『鏡』があったんだな。」

「「はい。」」

「わかった……二人共、少し……休んでろ。」

「「はい……失礼します。」」

リン社長にそう言われ、休むことにした……二人。

「ふぅ～……。」

リン社長は、一人……ため息をつき……少し、古い写真を見た。

「（先輩……あなた達も……ジェスと同じだったんですか？……だとしたら……どうか、お守り下さい……私の……後輩であり……『弟』を。）」

リン社長は、一人……心の中で祈っていた。

ハルゲギニア・トリステイン魔法学院

ルイズとジェスは、食堂に来ていた。

「これが……朝食ねぇ……。」

ジェスの前にあったのは……固いパンだった。
「にしても……使い魔で…そっちからしたら『平民』の俺がイスに座っていいのか？」
「べ……別に……意味はないわよ。……ただ……私と同じで……姉がいるんだ……って、わかったら…そのなんとなく……。」
最初こそ、大きい声だったが……徐々に声が小さくなるルイズ。
「あっ……そう。……まっ、パンがあれば十分かな。」
すると……
「スープぐらいなら……飲んでもいいわよ。」
「いや……スープは、ルイズが飲めよ。そうしなきゃ……背は伸びないぞ。」
しかし……この一言は、余計な事だったのかも知れない。
「……あ・ん・た、ねぇーーー！！」
「いっ！？」
「この……馬鹿ーーーーーー！！」
ルイズはジェスに杖を向け、小さな爆発を起こした。
「あうちっ！！？」

その後、教室で……

「ったく……危うく、死ぬところだったぜ。」
「ふんっ！」
「にしても……」
ジェスは、ルイズとの空気を警戒しつつ……授業内容を頭に入れ

ていた。
「（魔法の種類は、火…水…風…土…の四大源素で……『トライアングル』などのレベルがあるのか……。）」
何故か……初めて見る、この世界の文字を『最初から知ってる』かの如く理解していくジェス。
「それでは……ミス・ヴァリエール。ここに置いてある岩を……『金』に『錬金』しなさい。」
それを聞いて……
「なぁ、ルイズ……『錬金』って、なんだ。」
「そこに有るもの……例えば、『木の棒』を『剣』に変えちゃう魔法のことよ。」
「ふーん。（原理は俺が知ってるものと一緒か。）」
すると……
「できないのですか？ミス・ヴァリエール。」
「分かりました！やりま……「俺がやる！」…ちょっと！！」
「少し、試してみたいからな。」
「はぁ……わかったわよ。そのかわり、私を……あんたの側に、立たせなさい。」
そのルイズの要求を……ジェスは……
「了解。」
了承していた。
「する前に質問……『魔法陣』は、書いて良いのか？」
「構いませんよ。」
ジェスは、その授業の担当に質問し……返事を待ってから、魔法陣を書いていた。
「……よしっ！」
ジェスは、教卓の上に簡易版の魔法陣を書き、その上に岩を置いた。
「見たこと無いわね。」
「まあな……じゃっ！…やるか……ハッ！！」

すると……ジェスの両手と魔法陣の間に電気が流れ、岩が煙りに包まれると……煙りが晴れた時には、岩の代わりに金塊があった。
『スゲー……。』
「なんと……。」
教室中から驚嘆の声がざわめいた。……もちろん、ルイズは……
「あんた……すごいわね……使い魔の素質…かなり、高いんじゃ……「ぐっ……!?」……っ!!ちょっと!大丈夫!?」
岩を金塊に錬金した直後、ジェスが片膝を付いて……呼吸を荒くしていた。
「くっ……予想以上に……精神と体力を消耗するな。」
「ねぇ、大丈夫なの?」
「大丈夫だって……このくらい……」
「バカッ!大丈夫そうに見えないのよ!!……ちょっと、医務室に連れていきます。」
??? 「じゃあ、私も一緒に行こうかしら?」
「誰が……『ツェルプストー』の手なんか!!」
「あらあら……でも、ルイズの背だと……引こずるしか、できないんじゃ……。」
すると……ジェスの手に銃の様なものが現れ、二枚のカードが自動的に読み取られた。
ーRIDERSCHARARIDE……ONODERAYUUSUKE……HIKARINATUMIー
その二枚のカードは……『小野寺ユウスケ』と光夏海のカードだった。
「また……ですか?って!?」
「おいっ!大丈夫か?」
「ギャーギャー……わめくな……ユウスケ、夏海、ルイズの誘導で医務室まで頼むわ。」
『ああ。/分かりました。』

「こっち！」
ルイズは……医務室へと…ジェスを担ぐ、ユウスケと夏海を案内した。

数分後……医務室にて

「どうですか？」
「軽い疲労ね……でも、普通の疲労じゃない。」
「多分……授業で岩を金に錬金したせいかと。」
「それだけなら……良いけどね。」
すると……
「うっ！」
「「っ！？」」
ジェスが胸の辺りに手をもっていき……苦しそうにしていた。
「どうしたの！一体、何が！！」
「（くっ！……待つことしか……できないなんて。）」
そのジェスの精神は……
「（ここは……いったい……）」
そこには……様々な闘いが繰り返されている空間だった。
「（なんだ？これは……）」
？？？「貴方も……ディケイドの力を秘めてますね。」
「誰だ！」
「僕は紅渡……またの名を仮面ライダーキバ！……キバット！！」
『おっしゃー！行くぜ、渡……ガブッ！！』
「ちっ！」
紅渡と言う青年とジェスはお互いのアイテムを手にとった。
『変身！！』

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ＬＩＧＨＴＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥ―
しかし……
「ぐっ……！」
ライトブルーディケイドの変身が解除された。
「変身が……維持できない？」
『おい、渡……これは。』
「一緒に行こう……手を持って！」
「ああ……」

医務室内

苦しそうにしていたジェスの体が突然、光り出した。
『っ！？』
あまりの眩しさに目をつむる……ルイズと保健医、夏海（！）……かろうじて耐えているユウスケ（！）。
「この光りかたって！」
光が収まった時……そこには……
「ふぅ……。」
青年がジェスを肩に担ぐ形で立っていた。
「誰よ！あんた！！」
ルイズが詰め寄るが……
「説明は後でします。……今は、彼を回復させるのが先です。」
すると……
―ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ……ＲＥＣＯＶＥＲＹ―
またもや、自動的にカードがライドされ…ジェスの疲労を取り除いた。
「はぁ……はぁ……しんど～。」

「じゃあ……僕らは…」
「そうですね……それじゃ。」
ユウスケと夏海はそう言って……姿を消した。
「「消えた……。」」
しかし……渡とキバットだけは、まだ残っていた。
「カードが自動的に……ありえない。」
「渡……悪いけど……『ディケイドの力』は……破壊者と守護者にわかれてるよな……多分、ライダー同士の戦闘を避ける機能が……俺のベルトには付いてると思う。」
「分かりました……しばらくは、様子を見ましょう。」
渡がそう言うと……キバットと一緒に灰色のオーロラをくぐった。
「ふぅ……。」
ーぐー……ぎゅるるる……ー
「ルイズ……食堂に行くぞ。」
「あれっ？もう、そんな時間？……それじゃ、失礼しました。」
ルイズは……保健医にお礼を言って…ジェスを支えながら……食堂を目指した。

「一人で歩けるが……」
「つべこべ言わないの！さっきまで、倒れてたじゃないの！！」
「それは！！」
「良いから！……ちゃんと、歩きなさいよ。」
「……はぁ……わかったよ。」

ジェスは、その後……少し、ふらつき…ルイズに支えてもらいながら食堂にたどり着いた。

第2話　メイドと授業（後書き）

作者「まずいな……」
ジェス（ゼロ魔）＆ａｍｐ；ルイズ「「何が？」」
作者「次の話で……二股貴族少年を出すんだが……一気に、決闘に持ち込んでもなぁ～……。」
ジェス（ゼロ魔）「別に……良くね？」
ルイズ「次回、第３話……二股貴族と決闘前。」
ジェス（ゼロ魔）＆ａｍｐ；ルイズ「「お楽しみに！」」

ルイズ「読まなかったら……お仕置きよ！」

第3話　二股貴族と決闘前（前書き）

久々です。ライダー関係者が何人か出ておりますが！！ゼロ魔とライダー、ウルトラマンのクロス原作ブレイク物なので、あしからず。

第3話　二股貴族と決闘前

トリステイン魔法学院・食堂

ジェスとルイズの二人は……偶然、空いていた席に座り…シエスタとその他二名のメイドが料理を運んできた。
「どうぞ。」
「ありがとう。」
「サンキュー。」
シエスタ達が運んできた料理は……どれも、ルイズが見たことのない物だった。
「これは？」
？？？「それは、麻婆豆腐……という、料理だ。」
突然、厨房の方から……一人の青年が料理の名前を言いながら、ルイズの前にやって来た。
「誰よ、あんた。」
すると……
「お婆ちゃんが言っていた……世の中で覚えて置かなければならない名前は唯一つ……天の道を行き、総てを司る男……天道総司。」
天道総司……青年はそう名乗った。
「（天道……総司……なんだ？聞き覚えのある名前……なのか？あの時の紅渡との関係あるのか？）」
すると……食堂の入口付近で……二人の女子生徒と一人の男子生徒が口論していた。
？？？「ちょっと！ギーシュ！！あんた、昼食は私と食べる約束でしょ！！」
「えっ？そうだったかな……。」

「モンモランシー……いい加減に諦めたら？」
「何ですって！」
すると……
？？？「何の騒ぎだい？」
「「ん？……えっ！！」」
一人の男子生徒の声がしたと思ったら……口論の原因の男子生徒がもう一人いたのだ。
「ギーシュが……二人？……どうなってんの？」
遠くから見ていたルイズが疑問を出した。
「なんだ？」
「ん？」
天道とジェスの二人もそっちを見た。

「君が偽物だろう！」
『偽物は、そっちじゃないのかい？』
まったくの同一人物が口論をし始めた。……すると……
『くっ……こうなれば！！』
後から来た……ギーシュ（？）の姿が……異形な怪物に姿を変えた。
「「ひっ……！」」
「君達は下がっていたまえ……ここはこの僕が！！」
しかし……ギーシュの前に……天道とジェスの二人が立っていた。
「バカが？お前は……こいつは、俺達に任せろ。」
「なんだね？君達は！」
すると……赤いカブトムシが天道の右手に……ジェスはバックルを装着し…一枚のカードを持った。
「俺は……召喚された……仮面ライダーだ！」
「そして、俺は……最速の速さを誇る……仮面ライダー……」

そして、二人同時に……
「「変身！！」」
ーＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ＬＩＧＨＴＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥー
ーＨＥＮーＳＨＩＮー
ジェスは……仮面ライダーライトブルーディケイドに……天道は……仮面ライダーカブト・マスクドフォームに変身した。さらに……
「変身。」
「キャストオフ！」
ーＫＡＭＥＮＲＩＤＥＧＡＴＡＧＧＵー
ーＣＡＳＴ・ＯＦＦ……ＣＨＡＮＧＥＢＥＥＴＬＥー
ライトブルーディケイドは仮面ライダーガタッグ・ライダーフォーム（ライトブルーディケイドライバーのバックルはクロックアップ発動スイッチの横に移動しガタッグゼクターがバックル部分にある……士のディケイドとは異なる別ライダーへの変身らしい。）、仮面ライダーカブトはマスクドフォームからライダーフォームに二段変身した。
「行くぞ……。」
「ああ！」
『クロックアップ！！』
ーＣＬＯＣＫ・ＵＰー
「ブルルル……ッ！！」
カブトとＬＢＤガタッグのクロックアップにワンテンポ遅れて異形……マンティスワームもクロックアップした。

カブトとＬＢＤガタッグがクロックアップして……ギーシュ達やシエスタ達が目視できないでいたが……ルイズだけは……
「（何？……左目の方に……何か見える……さっきの怪物と

…赤いカブトムシ？……ひょっとして、あいつの？）」
ルイズの左目にＬＢＤガタッグを通しての状況が見えていた。

カブト＆ａｍｐ；ＬＢＤガタッグ対マンティスワーム

挿入曲ＦＵＬＬＦＯＲＣＥ

「ハッ！！」
「ハッ、タァッ！！」
「ブルルル！？」
カブトＲＦは、カブトクナイガン・クナイモードで……ＬＢＤガタッグは、ガタッグダブルキャリバーで…ワームに攻撃を加える。
ーＣＬＯＣＫ－ＯＶＥＲ－

高速移動が終わり、通常に戻る。
「行くぞ……ちゃんと、合わせろ。」
「ああ。」
ーＯＮＥ－（カブトのバックル部）
ーＴＷＯ－（ＬＢＤガタッグのガタッグゼクター部）
ーＴＨＲＥＥ－（同時）
「ライダー……キック。」
「ライダーキック！」
ーＲＩＤＥＲＫＩＣＫ－
タキオン粒子が二人のライダーの右足に集まる。
「ハッ！！」
「オリャァッ！！」
「ブルル！？？」
ードンッ！－
二人同時のライダーキックを受けて、食堂の外で爆発するワーム。

（クロックアップ中に食堂の外に出ていたらしい。）
「ふぅ……流石だ、渡が認めるだけはある。」
「渡？…紅渡のことか？」
「ああ。」
「（紅渡を知っている……あいつもライダーだった。まさか……）」
すると……
「困るねぇ、君達。」
『ん？』
「彼女達の前で僕が……怪物を倒して、さらに人気を得る……僕の計画を邪魔してくれたね。」
「計画ね……バカか？」
「それに……ワームに頼む時点で既に間違ってるな。」
「何だと。」
「だいたい……二股するのがそもそも間違いなんだよ。」
「言ってくれるね……ん？」
ジェスと天道の二人からの指摘を受けているギーシュは、ジェスを見て…何かを思い出した。
「なるほど……君が…『ゼロのルイズ』が召喚した使い魔かい？」
「それがどうした？」
「君に決闘を申し込む！！」
「はぁ？」
そこへ……
「ちょっと！ギーシュ！！貴族の決闘は禁止されてるのよ。」
ルイズやシエスタ達がやってきた。
「正確には貴族同士よ、ルイズ。」
「うっ……。」
「そう……彼は『平民』だ。さて、決闘を…「伏せろ！」……へっ？」
『ギシャー！』

「ギーシュ！後ろ！！」
「なっ！？」
「メラ！ヒャド！」
『ギャンッ！』
「ふぅ。」
ギーシュの背後にいた、中型の魔物は……ジェスのメラとヒャドで撤退した。
「これでも平民か？」
「（いまのって……魔法？）」
「ぐっ！？……しかし、その力もルイズとの契約で手に入れたんだろう？決闘は受けてもらうよ。」
「はぁ……仕方ねぇな。」
「では……明日！ヴェストリィ広場で会おう！」
ギーシュはジェスにそういって去って行った。
「ちょっと！？……決闘なんて……受けちゃダメでしょ！！」
「売られたケンカは、買う……それが、心情だ。」
「でも……死んでしまいます！」
「心配してくれてありがとな……ルイズ、シエスタ。」
「「／／／」」
「大丈夫だ……俺は、負けないから。」
「わかったわよ……信じる。」
「私も信じます。」
「それに……」
『それに？』
天道以外のメンツがジェスの言葉に耳を傾けた。
「場所は指定されたが……『バトルフィールド』は俺が決める。」
『？？？』

その夜……

BGM・星空のバラード

「……」

ジェスは一人で中庭に出て、星空を眺めていた。

「……姉さん……俺が居なくて……心配してるよな。」

すると……

「ねぇ！」

「ん？……ルイズか。」

「まったく……明日が決闘の日なのに……なんで寝ないのよ。」

「眠れねぇんだよ。」

「え？」

「確かに……明日は決闘の日。だけどよ……相手はメイジ……俺はこの世界では平民だ。」

「だったら！昼間に使ってたマジックアイテムを使いなさいよ！！」

「あの力は怪人に対抗する為の力だ！！……人には使えない。……それに…人は傷つけたくない。」

「……。」

すると……

???「お前！……仮面ライダーか？」

右手が二人の間で浮かんでた。

『みっ！右手がしゃべってる！！』

同時に声を出す、ジェスとルイズ。

???「なるほどな……お前は、『あいつ』とは、別の存在か。」

少し意味不な事を言っている右手。

「お前……何なんだ？」

「俺は…アンクだ！」

「アンク？…っ！！」
「おっ、おいっ！？」
「ちょっと！大丈夫？」
急に頭が痛くなったジェスにアンクとルイズが近寄る。

ジェスの脳内映像

映司「アンク！メダル！！」
アンク「無くすな！映司！！」
ジェス（なのは&スーパーヒーロー作戦）「行くぞ！」
翔太郎「行くぜ……フィリップ。」
―ＪＯＫＥＲ―
映・翔・ジェス『変身！！』
《タカ・トラ・バッタ……タ・ト・バ…タトバ…タ・ト・バ！》
―ＣＹＣＬＯＮＥ・ＪＯＫＥＲ―
―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥ―

「はっ！？」
「大丈夫？」
「あ、……ああ。……今のは？」
？？？「この世界の君とは別の存在さ。」
ジェスとルイズ……ついでにアンク（なっ！？）の側に一人の青年がやってきた。
「お前は……」
「僕は、フィリップ……よろしく。」
「フィリップ？」
「ああ……それにしても…翔太郎とはぐれるなんて……。」

「はっ！…そっちも似たような感じなんだな……こっちは映司に俺の仮の体も別のところだ。」
「なるほどね……」
そこへ……
???「じゃあ……メダルを奪い易くなったんだ。」
「誰だ！」
暗がりから……ライオン、トラ、チーターの特徴的な部位が見られる怪人が現れた。
「カザリか……。」
「アンク……君のメダル、貰うよ。」
カザリがアンクに近づくが……
「そうは……させないぜ！変身！！」
ーＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ＬＩＧＨＴＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥー
「へえ……ん？……スタッグフォンが鳴ってる。」
『フィリップか！？』
「翔太郎かい？……ちょうどよかった。変身するよ。」
『何かあったのか？わかった……行くぜ、フィリップ！！』
「来いっ！ファング！！」
《キィキィ！！》
ーＦＡＮＧー
「『変身！！』」
ーＦＡＮＧ・ＪＯＫＥＲー
「『さあ……お前の罪を数えろ。』」
「邪魔するんだ？……いいよ、こっちも退屈だったし。」
そう言いながら…カザリは、自分の体のセルメダルを何枚か取り出して、半分に割り、周りに撒き……屑ヤミーを作り出した。
「ちっ！……屑ヤミーか。」
「行くよ？翔太郎。」
『ああ！いつでも良いぜ。』
ーＡＲＭＦＡＮＧー

「相手の数が多いな……だったら！」
―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……―
「変……身！！」
―ＡＣＣＥＬ―
「さあ……振り切るぜ！！」
『仮面ライダーアクセル！？』
「彼もディケイドの一人だからね。」
『それも、そっか。』
―ＦＯＲＭＲＩＤＥ…ＴＲＩＡＬ―
「全て……振り切るぜ！」
―ＴＲＩＡＬ―
「行くよ？」
「ああ！」
フィリップの変身した仮面ライダーＷ・ＦＪとＬＢＤアクセルトライアルが屑ヤミーに挑む。
「仮面ライダーは屑ヤミーに任せるか……アンク、君のメダル貰うよ。」
「ちっ！」
すると……
―ビュンッ！！―
アンクとカザリの間を高速で飛ばした水の矢が走った。
「誰？危ないなぁ……」
？？？「あ～あ……外れちゃった。」
？？？「注意を逸らしただけでも上出来だよ。」
？？？「そうかな／／／」
？？？「良いから……さっさと行け！！」
？？？「わかってるよ……変身！」
―カブト・ハヤブサ・パンサー……カ・ヤ・サー……カヤサー……カ・ヤ・サー―
？？？「ハァッ！！」

「くっ！？」
アンクとカザリの間に一人の戦士が割り込んだ。
「何なの？君……」
「レルズ……仮面ライダーレルズだ！」
「（別のコアメダルだど！？）」
レルズの登場にアンクが戸惑っていると……
「助けてあげたのよ……感謝してよね。ア・ン・ク（ウインク付き）」
「キャラに合ってないぞ……メズール。」
「ウヴァ……私のこと……嫌いなんだ。」
「ばっ！馬鹿かっ！！……そんなこと言ってないだろ！」
「ウヴァにメズールか……」
レルズの後から……ウヴァとメズールもやってきた。
「ちっ……やっぱ、昆虫系のメダルがヘッドだったら不利だな。」
「ったく……メダルを貸してやる！そのかわり無くすなよ！！」
アンクはレルズに自分のコアメダルを三枚投げた。
「オッケー。」
―タカ・クジャク・コンドル……タ～ジャ～ドル～―
「ハッ！」
「（映司と同じか……）」
レルズがタジャドルコンボになると同時に……ＷＦＪとＬＢＤアクセルトライアルが列んだ。
「屑ヤミー達……後は頼むよ。」
カザリは屑ヤミーにその場を任せ、姿を消した。
「二人とも……行くよ。」
―ＦＡＮＧＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ―
「ああ。」
―ＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ……Ａ・Ａ・Ａ・Ａ・ＡＣＣＥＬ―
「ハッ！」

―タカ・クジャク・コンドル……ギン・ギン・ギン・ギン・ギガスキャン！！―
「『ファングストライザー！！』」
「フッ！……ハッ！ハッ！ハァッ！……タァーーーーーーーーッ！！」
「ハァーーーーーッ……ハッ！！」
―TRIALMAXIMUMDRIVE―
「9．9秒……それがお前達の絶望までのタイムだ。」
―バンッ！……―
屑ヤミー達は三人のライダーの攻撃で元のセルメダルに戻った。
「……屑ヤミーだから…たいしたメダルにならなかったな。」
「カザリは少しケチだからね～。」
『それは、違う。』
メズールの一言に同時に否定するアンクとウヴァ。
「（まさか……一日でライダー関係者に連続で会うとはね。）」
「それよりも……あんた達さ…泊まるところあんの？」
……暫しの沈黙……
「無いな。」
「無いわね。」
「確かに無いね～。」
様々に寝所が無いことを主張した。
「仕方ないわね……私の……「止めとけ。」……なんでよ！」
「多分……無断で泊めたら罰則があるんだろ。」
「う……それは……そうだけど。」
？？？「それは問題ありません。」
《キャッスルドラン！》
『っ！！』
声が聞こえたと同時に……城と龍が合わさった感じの生き物が現れた。
「キャッスルドラン……仮面ライダーキバに出てる……アーム

ズモンスターやキバット族にドラン族が住む……。」
「フィリップ君とアンク、ウヴァ、メズール……それと…ジョウは、キャッスルドランの中で生活をしてもらいます。」
「渡……頼む。」
「ええ……本来なら、フィリップ君とアンクの二人はすぐにでも…元の世界に戻っていただきたいのですが……この世界に『ガイアメモリ』に酷似している物があるので……サンプルに一本か二本…回収してもらいます。」
「構わないよ。翔太郎とも合流しなきゃいけないからね。」
「俺も映司がいないからな……仕方ない。」
「ん～～……一時的に世話になるか。」
フィリップ、アンク、ジョウ、メズール、ウヴァは、キャッスルドランで寝ることになった。

第3話　二股貴族と決闘前（後書き）

ルイズ「なんか……調子狂うわね。」
ジェス（ゼロ魔）「爆発シーンが少ないからな。」
ルイズ「……」
ジェス（ゼロ魔）「なんだよ？その間は？」
ルイズ「あんたが！！かっこよすぎるからでしょ！！！！！！！！！！！！！」←爆発付き！
ジェス（ゼロ魔）「うおっ！？あぶねぇ……次回は、決闘！！」
ルイズ＆amp；ジェス（ゼロ魔）『お楽しみに！！』

第４話　決闘（前書き）

どこかが……妙かも知れませんが……お楽しみを。

第4話　決闘

―ヴェストリィ広場―

ヴェストリィ広場では……すでに、ギーシュが待っていた。ジェスは、ルイズ、シエスタ、モンモランシー、キュルケ、青髪に眼鏡をかけた少女『タバサ』、天道、フィリップ、アンクを右手に付けたジョウ、青年の姿をとったウヴァ、女子高生の姿をしたメズール、渡とキバット……ジェスの応援と戦闘の見学者を被害の出ない所まで連れて行った後に……ギーシュの向かいに立った。

「よく来たね……逃げなかったのは……褒めておこう。」

「男に褒められても……うれしかねぇ！！」

ジェスの台詞は、ごもっとも……。

「貴族の僕に向かって…その言い方……まぁ、君は僕には……勝てないから当然かな？」

「ずいぶんな……自信だな。」

「まあね……さあ……始めようか。ワルキューレ！！」

ギーシュは叫ぶと同時に……金属製の人形を一体作り出した。

「（っ！……金属の人形か……。）」

その様子を見ていたルイズ達は……

「ギーシュの奴！……ワルキューレを使ってから闘うき？」

「でも……ジェス様には……『あの力』が……「無理よ……シエスタ。」…えっ？」

「ルイズ？……あんた、何か聞いてんの？」

「『あの力』は……人間相手には……使えないようなの。」

「……大丈夫……」

『タバサ？／タバサ様？』

「あの人は……負けない。」

ルイズ達が会話中でも……渡達は静かに見守っていた。

視点戻って……ジェスとギーシュ。
「さあ……あの姿になったらどうだい？」
しかし……
「断る！！」
「そうか……だったら、ワルキューレに攻撃させて出すだけ……何だけど……素手は可哀相だし……武器を与えよう。」
「武器？」
「そうさ……言い忘れていたが……僕の二つ名は『青銅のギーシュ』さ。この……ワルキューレも青銅で出来ているからね。」
「気持ちだけ……受け取ろう。生憎だが……武器は……自分でだせる！！『メビュームブレード』！！」
「なっ！？」
『えっ！？』
ジェスは……ギーシュの申し出を断り……左手首のルーンから光の剣を生成した。
「（うまくいったか……ふっ）勝負！！」
ジェスは、ワルキューレ目掛けて……走り出した。
「くっ！……ワルキューレ！！」
「ハァッ！！」
ジェスの光の剣とワルキューレの青銅の槍が衝突した。
「ぐっ！？」
しかし……青銅の槍によって…光の剣が弾かれた。
「まったく……期待ハズレの攻撃だね。」

ルイズ達は……

「やっぱり……平民では……」
『……』
すると……
「ジェスーーーーーッ！！」
ルイズが大声でジェスの名前を叫んだ。

その声は、ジェスの耳に届いていた。
「ルイズ？」
「ジェス！！あんな……バカに負けたら……絶対に許さないからね！あんたが負けてもいいのは……わたしだけなんだからーーーーーーーーっ！！絶対に勝ちなさい！！」
「ったく……恥ずかしくねぇのか？……でも、うれしいねぇ。」
ルイズの応援というか……変な告白？でやる気が入り……ファイティングポーズをとるジェス。
「まだ……やるきかい？」
「（いくら……メビュームブレードが再現できても……光エネルギーがないから……夢で見てた……威力は出ないか……ん？待てよ……武器として……認識したり……考えれば……よしっ！！）」
ジェスは……ファイティングポーズを解いた。
『えっ！？』
「ジェス？」
「っ！？」
「あきらめたか……ワルキューレ！！」
ワルキューレがジェスに向かってきた……その時！！
「っ！！！」
ーズバババッ！！ー
「チェック！」
ジェスの一声でバラバラになる青銅の人形。

「なっ！？」
驚くギーシュ。ルイズ達は……
『凄い……』
『はやすぎ……』
「いっけー！ジェスーーーッ！！」
驚き四人の応援一人……そして……
「あのスピード……興味深い。」
「流石だな。」
「はい。」
『いえい！！』
様々な感想のライダー達。

「いったい……なにが……」
「ふぅ……まさか、メビュームブレードを『武器』と……完璧に認識してなかったのか。」
「だ……だが！！」
すると……ギーシュは、さらに六体のワルキューレを作り出した。
「はぁ……最初はそっちに合わせたんだ……今度は、俺の番だ！」
―パチンッ！！―
ジェスは……ギーシュの行動に驚く事もなく……頭上で指を弾いて鳴らし……その場の全体を包み込むドームを形成した。

ドーム内・スタジアム

ドームの中は……いつかのライダーバトルトーナメントで使われた、スタジアムそっくりだった。しかも……変化は、それだけではなかった。

？？？「なんだ？いきなり森から……スタジアム？」
？？？「びっくりしたー……でも、アンクを探さなきゃ。」
すると……
「翔太郎！」
「『映司！（さん！）』」
「「えっ！？」」
翔太郎と映司、それに……アンクが身体を借りてる信吾もいた。
「『おいっ！俺を飛ばせ！（ああ！）』」
ジョウは、右手のアンクを信吾目掛けて飛ばした。

一方……
「フィールドを変化させたのかい？……でも、勝てないよ。ワルキューレ！！」
ギーシュが叫ぶが……ワルキューレは動く気配がなかった。
「なっ！？」
もちろん……こちらも……
「フレイム！……出ないわね。」
「魔法が……使えない？」

ギーシュとジェスの方は……
「（魔法が……使えないのか……だが！条件は向こうも同じはず！！）」
ギーシュは確認の為にジェスの方を見た……すると、光の剣は発動したままだった。
「なにっ！？」
だが……ギーシュが驚くのはこれからだった。
「ワルキューレが六体か……楽勝だな。ふんっ！」

同時にジェスが二人になった……一人はメビュームブレード……一人はナイトビームブレードを展開して。
「なっ！？」
『ジェスが／ジェス様が……増えた！？』
『行くぜ！』
驚きに包まれる……『魔法関係者』……それをよそに……二人のジェスが動く。
「メビュームブレード！……メビュームインパルス！！」
「ナイトビームブレード！……ナイトクラッシュ！！」
二人のジェスがそれぞれ動き……四体のワルキューレを破壊。
『さて……ラストは……これだ！！』
すると……二人に分かれていたのが……一人に戻り、新たな光の剣を生成した。
「メビュームナイトブレード！！……インフィニティースラッシュ！！」
残った二体を【∞】（無限大）のマークが入る技で倒した。
「そんな……僕のワルキューレが……それに……此処は……」
「此処では……どんな魔法も使えない。」
「だったら！君の使い魔の力も使えないはず……なんで！使えているんだ！！」
「悪いが……このブレスは元々……魔法の関連性は皆無でな！！」
「くっそー……こうなったら！」
すると……ギーシュは服の内ポケからＵＳＢメモリに似ている物を取り出した。
―ＲＯＳＥＫＩＧＨＴ―
『ガイアメモリ！！』
「止めろ！ギーシュ！そのメモリは！！」
「うるさい！負けるはずがない……平民ごときに……この僕が！！」
ギーシュはジェスが止めるのを聞かず……生体コネクターにメモ

リを挿した。……すると、ギーシュの身体がたちまち異形に変わった。

「ちっ……あの、バカ野郎。」

『ハァーーーーーーーッ！！』

「くっ……仕方ない。左！火野！ジョウ！手伝え！！」

ジェスは、客席にいるジョウ達を呼んだ。

「行くぜ……半分力貸せよ…相棒。」

「もちろんさ……翔太郎。」

「アンク！」

「ウヴァ！」

『メダル！！』

「無くすな！映司！！」

「しっかりやれ！ジョウ！！」

「天道さん……僕達も……」

「仕方ないな。」

翔太郎達は客席から……スタジアム中央のジェスの位置まで移動した（フィリップ以外）。

「行くぜ……みんな！」

『ああ！』

ーＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ー

「行くぜ、フィリップ！」

『ああ……翔太郎。』

ーＣＹＣＬＯＮＥー

ーＪＯＫＥＲー

「キバット！！」

『おっしゃー！キバッて行くぜ？渡！……ガブッ！！』

そして……仮面ライダーでは……お馴染みの！！

『変身！！』

ーＬＩＧＨＴＢＬＵＥＤＥＣＡＤＥー

ーＣＹＣＬＯＮＥ・ＪＯＫＥＲー

―タカ……トラ……バッタ……タ・ト・バ…タトバ…タ・ト・バ！―
―カブト……ハヤブサ……パンサー……カ・ヤ・サー…カヤサー…カ・ヤ・サー！―
―ＨＥＮ－ＳＨＩＮ……ＣＨＡＮＧＥ・ＢＥＥＴＬＥ―
仮面ライダーに変身したジェス達……しかも……全員で示し合わせしたかのように……
『さぁー……お前の罪を数えろ！』
仮面ライダーＷの決め台詞を言った。
『ウオォーーーーー！！』
「オーズとレルズは……メダルチェンジして足止め！カブトとキバは後方からオーズとレルズの援護！……Ｗは俺が『アクセル』になったら……同時にアタックだ。」
「ああ！」
「わかりました。」
「仕方ない。」
「確かに効率的です。」
「おっし……行くぜ？フィリップ。」
『ああ……そうだ……ルイズちゃん、僕の身体を頼むね。』
「オッケー！！」
「へっ……行くぜ！」　そして……アンクとウヴァが同時に……
……
『接近戦ならこのメダルだ！！』
『カマキリコア』をオーズとレルズに渡した。
―タカ…カマキリ…バッタ―
―カブト…カマキリ…パンサー―
『ハァッ！！』
「キバット！」
『遠距離ならこいつだ！！』
キバは……『緑のフエッスル』をキバットに噛ませた。
『バッシャーマグナム！！』

―キャッスルドラン内―

ババ抜きをしていた……ガルル達……すると、バッシャーの召喚メロディーが鳴り響く。

「あっ！喚んでる……じゃあ、行ってきます。」

「ああ。」

「いって……らっ…しゃい。」

スタジアム

キバの下にバッシャーマグナムが飛来した。

「ハッ！」

キバが右手でバッシャーマグナムを持つと……キバの右腕と胸の色が緑に変わり……キバットの目も緑に変わった。これが仮面ライダーキバ・バッシャーフォームだ。

「ふだんは……この形態でガンは、使わないがな。」

カブトは……そう言いながら、カブトクナイガンをガンモードで手にとった。

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……―

「変……身！！」

―ＡＣＣＥＬ―

ライトブルーディケイドは仮面ライダーアクセルに変身した……

…しかも……

「さぁ！振り切るぜ！！」

「って！おもいっきり……照井じゃねぇか！！」

「行くぞ……左！！」
「おいっ！大丈夫かよ？」
「俺に質問をするな。」
「へっ……オッケー。これで違和感ねぇぜ。」
ＷとＬＢＤアクセルはカブトとキバ・バッシャーの間を通り……
オーズ・タカキリバとレルズ・カブキリサーとの連携でローズナイトドーパントに攻撃を加えていく。
『ウガァーーーーー！！』
「よしっ！これで……」
最後の一撃の体勢に入った時に……『グレード大ショッカー』のマークが浮かぶオーロラが発生し……そこから、アラクネアワーム、スパイダーファンガイア、バタフライヤミー、サメレオンヤミーが現れた。
「なんだ？」
『グレード大ショッカー……まさか奴らが噛んでいるとは……』
「仕方ねぇ……他の怪人は頼むぜ！ハッ！オラァ！！」
『ああ！／わかりました。／オッケー！』

カブト対アラクネアワーム

「行くか……クロックアップ！」
―ＣＬＯＣＫ－ＵＰ－
カブトはアラクネアワームよりも早く……クロックアップした。
キバ・バッシャーはバッシャーマグナムから超高速の水圧弾を打ち出し……スパイダーファンガイアにダメージを与えていく。
『渡！ここは……いつものアレで決めようぜ。』
「そうだね……キバット。」

キバはバッシャーマグナムを放し……基本のキバフォームに戻り、キバットに笛を噛ませた。
『ウェイクアップ！！』
「ハァーーー……ハッ！！」
キバが右足を振り上げる動作を行う中で……背景は月夜へと変わった。
「ハッ！！……ハァーーーッ！！」
キバのダークネスムーンブレイクがスパイダーファンガイアを捉え……スパイダーファンガイアの逃げる暇を無くして……ファンガイアを倒した。

オーズ&レルズ対バタフライヤミー&サメレオンヤミー

「バタフライヤミーか……前は、サゴーゾで勝ったけど……」
「サメレオンか……水棲と猫科の融合ヤミーか……」
「映司！そいつにはこのコンボだ！！」
「ジョウ！私のコンボを使って！！」
アンクは映司に……メズールはジョウに……それぞれ自身のコアメダルを渡した。
「わかった、アンク。」
「サンキュー！メズール！」
オーズとレルズは同時にメダルチェンジし、メダルスキャンした。
―タカ・クジャク・コンドル……タ～ジャ～ドル！―
―サメ・ウナギ・タコ……サ・サ・サウタ……サ・サ・サウタ―
オーズはタジャドル、レルズは真・亜種コンボたる『サウタコン

ボ』にスタイルチェンジした。
「一気に決めるぞ！オーズ。」
「うん！」
――スキャニングチャージ――
『ハッ！ハァーーー……セイヤーーーー！！』
バタフライヤミーとサメレオンヤミーは……オーズとレルズがメダルチェンジをしていた間に……ウヴァに一カ所に纏められてしまっていたので……避けれず……オーズ・タジャドル&レルズ・サウタの必殺技を受けて……セルメダルになった。
『上出来だ！』
「メダルは……山分けよ。」
「ちっ……」
「はぁ……しょうがない。」
一人で全部のセルメダルを取ろうと考えていた……アンクとウヴァだが……メズールに咎められ山分けすることになった。

LBDアクセル&WCJ対ローズナイトドーパント

WとLBDアクセルは……素早い連携と連続攻撃でローズナイトドーパントにダメージを与えていた。
「ハァッ！！」
「ハッ！……オリャッ！！」
『グゥゥ……』
「さてと……そろそろ……決めるか。」
―ACCELMAXIMUMDRIVE―
「ああ……これで決まりだ。」

―ＪＯＫＥＲＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ―
『ウオォーーー！！』
ローズナイトドーパントがＷとＬＢＤアクセルに接近しようとしたとき……
「『ジョーカーエクストリーム！！』」
「アクセルグランツァー！！」
『グッ！』
「絶望がお前のゴールだ。」
『ウアァ……』
―ドンッ！―
爆発が起こった後には……メモリを使用した副作用で倒れたギーシュと……形状を保ってる『ガイアメモリ』があった。
『サンプルの回収完了。』
「こいつ……『Ｔ２メモリ』か？」
「まだ……断定は出来ないだろうな……渡！！」
ジェスは変身を解き……Ｗからメモリを受け取り、渡にパスした。
「確かに…。」
そこへ……
「ジェスーーーッ！！」
「ルイズ！」
ルイズ達がジェス達の下に駆け寄った。
「ギーシュは？」
「気を失ってるだけだ。」
「そう。」
「フィールドを元に戻すから……ライダーは変身を解いてくれ。」
『ああ。』
ジェスの一言で各々変身を解くライダー達。
「それじゃ……フィールドを戻すぜ。」
ジェスは……先程まで展開していたフィールドを消滅させ、元

のヴェストリィ広場に戻した。
「さてと……戻るか。」
『ああ。／ええ！』
渡達は、キャッスルドランの方角に……ジェスとルイズ達は学生用の宿舎に帰っていった。

第４話　決闘（後書き）

ジェス（ゼロ魔）「だんだんと……いや！かなり……原作とは掛け離れてるな。」
作者「だってさ……原作維持なんてさ……ライダーを入れた時点で無理じゃん。」
ジェス（ゼロ魔）「ふーん……で、次回は？」
作者「ゼロ魔では絶対に必要な……しゃべる剣をだします。」
ジェス（ゼロ魔）「タイトルは？」
作者「まだ……決めてない。」
ジェス（ゼロ魔）「おいっ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1280t/

ゼロの使い魔～光と仮面の戦士～

2011年12月29日06時45分発行